

VI. 総合考察

VI. 総合考察

この研究成果報告書において報告した内容は、予備的・準備的研究と位置づけられた平成24年度の研究（専門研究D）、及び平成25-26年度に実施した本研究（専門研究B）の研究活動の成果である。本研究の目的は、重い障害のある幼児児童生徒の実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善というPDCAの過程に必要な視点や情報を提供する情報パッケージを作成し、現場での活用のしやすさや有用性を検証することであった。本研究では、この情報パッケージの対象となる重い障害のある子どもを「複雑で多様なニーズのある子ども＝手厚い支援を必要としている子ども」と定義した。そのうえで、手厚い支援を必要としている子ども（及び家族）の「現在及び将来を支える教育計画を作成し実施する」という本人中心の計画（Person-Centered Planning）の観点から、個別の教育支援計画、個別の指導計画等の作成と実践に資する情報パッケージ（試案）を作成するとともに、学校現場での有用性の検証を通じ、その改善充実を図ることを目指すことを目的とした。この2年間、研究計画に基づいた研究活動を計画通り実施することができ、初期の目的は達成されたと考える。

本章では、この研究の成果を概観し、本研究で開発した情報パッケージ「ぱれっと（PALETTE）」の今後の普及活動や普及のためのさらなる研究につながる考察をしたい。

1. 研究の成果について

（1）「本人中心の計画（Person-Centered Planning）」の考え方の教育現場への導入

手厚い支援を必要としている子どもの実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善への課題の解決策として、「本人中心の計画（Person-Centered Planning）」（以後「本人中心の計画」と表記）の考え方を軸として情報を整理し提供した情報パッケージ（試案）を作成した。この情報パッケージに、「本人中心の計画」の考え方を自然体で表現する「ぱれっと（PALETTE）」（以後「ぱれっと」と表記）という通称が決定したことは最初の大きな成果であった。この通称が決まったことで、研究スタッフ、研究協力者、研究協力機関の間では、「『ぱれっと』をよいものにしよう」という思いがより強くなり、「ぱれっと」（試案）の作成過程においても、その成長を見守るようなチームとしての結束力が生まれたように思う。なにより、研究協議会が、毎回議論が白熱する学びの場となり、研究協力者や研究協力機関に研究への参画を喜んでいただけたことは大変ありがたかった。

「本人中心の計画」の考え方は、日本においては福祉領域で先行して実践されているものの、研究開始当時には、教育現場への導入について困難が多いと思われた。しかしながら、PDCAのプロセス全般にかかる包括的なパッケージとして提案すること、学習指導要領との関連性を明らかにすること、マニュアルではなく考え方を共に示し考えるツール

として提案すること等、日本の教育現場に受け入れられるような仕掛けを工夫することによって、手厚い支援を必要としている子どもを教育する日本の学校現場で「本人中心の計画」への理解を深め、実践の軸となる可能性を示すことができたのではないかと考える。

「本人中心の計画」の考え方を軸とする情報パッケージ「ぱれっと」は、その活用の仕方によっては、手厚い支援を必要としている子どもの実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善への課題解決に資するツールとなることが示唆された。

（２）研究協力校における活用の成果

作成した「ぱれっと」（試案）については、研究協力校 9 校において活用の仕方を探っていただいた。研究協力機関は、肢体不自由、知的障害、聴覚障害、視覚障害と対象とする障害種は多様であったが、いずれの学校においても「手厚い支援を必要としている」子どもは在籍し、活用することができた。活用の方法は、4 つのタイプに分類できた。すなわち；①学校全体の取組に位置付けた活用、②研修・人材育成等における活用、③ケース検討等における活用、④個人での活用及び感想等の分析、であった。

これらの研究協力機関における活用状況の中で、「ぱれっと」作成の当初の目的であった、「教員が考えることを支援するツール」、また「子どもを取り巻く関係者が共有するツール」として「ぱれっと」が活用できたか、という点では、うまく取り組むことができた学校、あまりうまく取り組めなかった学校があると思われる。「ぱれっと」活用の事前事後のアンケート調査の比較でも明らかになったように、「ぱれっと」をマニュアル的に読むだけではなく、その軸となる考え方を理解しようとし、自身の実践を振り返るツールや子どもの見方を共有するツールとして活用したとみられる群では、実践の実施状況や意識にポジティブな変化が表れていた。このような成果が多く教員に見られた学校の活用の仕方には、どのような特徴があるだろうか。

子どもの「一番星」に寄り添う取組を学校全体で進めていた学校では、「教務便り」で「ぱれっと」の項目内容を分かりやすくイラスト入りでお知らせする等、必要な情報を皆が共有しやすい工夫をしていた。担当者は、『「ぱれっと」をただ使ってね、と教員に渡すだけでは活用は難しく、その教員にとって必要な内容を分かりやすく伝えてくれる翻訳者のような存在が必要なのでは』と述べていた。

初任者研修で活用した学校では、初任者の困っている状況の解決のために、「ぱれっと」を活用していた。このように「壁にあたった時に考える手がかりとなる」という声は多く聞かれた。また人材育成のツールとして活用した学校では、経験の浅い教員と経験の長い教員 2 名が、実践を振り返りつつ、同じ項目（家庭との連携）を何度も読んでディスカッションをしていた。経験が浅い教員について、この活用の後では、「家族との連携に係る項目については自己評価が低くなり、重要と考える項目が増えた」という変化が現れた事実は大変興味深い。この事例では、自己評価の低さについては必ずしもマイナスではなく、「もっと学ぶべきことがある」という意欲や省察力の表れであると考察している。教員の

意識の変化については、他のケースについても、今後、調査票とインタビュー等と組み合わせた分析によって個別に詳細に見ていく必要があると思われる。「ぱれっと」を活用することで、手厚い支援を必要としている子どもと教育的に関わることに喜びを感じる教員が増えてくれることを願いたい。

ケース検討で活用した学校の報告では、チームで子どもの状態の見方や教育の方針を共有することが、子どもに対するお互いの理解を深め、子どもの成長を促すことが報告されている。子どもについての理解を保護者と共有するために「ぱれっと」を活用していた学校も多かった。

以上のような研究協力校における活用を通して、「教員が考えることを支援するツール」、また「子どもを取り巻く関係者が共有するツール」としての、「ぱれっと」の可能性について検証することができた。ここで紹介したような学校での実践事例を整理して広く紹介することによって、多くの学校で、改良した「ぱれっと」を活用し、同様の成果が得られることを期待したい。

2. 今後の普及に向けて

今後は、作成した情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案)に、研究協力機関、研究協力者、その他関係者からいただいたフィードバックを吟味の上反映し、改良・出版する作業を予定している。現在計画している改良点8項目については、前章で述べた。今回の研究では、「ぱれっと」(試案)を活用した対象は特別支援学校に在籍している子どもであったが、今後は小・中学校等で学ぶケースも対象として想定され、それに伴って情報提供が必要と思われる項目が増えていく可能性がある。

普及に向けては研修の在り方を検討する必要がある。教育センターでの研修、特別支援学校での研修、小・中学校で学ぶ障害の重い子どもを担当する教員のための研修、管理職を対象とした研修等、様々な研修の対象が考えられる。また、研修形態にしても講義・演習とOJTの組み合わせ等、効果の高い研修の在り方を検討する必要がある。「ぱれっと」を活用して職員研修を実施しようとする学校では、どのような経験のある教員が、いつ頃、どのような項目内容の情報を得たり演習を行ったりすることが効果的なのか、等の実践知を積み上げることが望まれる。

さらに、「ぱれっと」は個人で活用するより、チームで共有するツールとなることでその良さをより引き出すことができる、という声もあった。その意味からは、個人の理解を促す研修の他に、チームとしての活用を促すことを目的としたファシリテーター役の教員の研修についても検討に値すると思われる。

英国では2014年9月より、新制度の下、重い障害のある子どもの包括的な支援計画が作成されることとなり、教育と福祉の領域が連携して「本人中心の計画(Person-Centered Planning)」の考え方に基づく計画を作成し、実施することが法的に位置づけられた。日本においてはインクルーシブ教育システムの充実を図る上でも、子どもと家族主体で地域

における自立と社会参加を目指した教育的支援を計画し実施する「本人中心の計画 (Person-Centered Planning)」の考え方は、今後ますます重要になってくると思われる。情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」が広く活用され、手厚い支援を必要としている子どもの自立と社会参加や、QOL の向上の一助となることを願う。

